

二〇二二年度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は、1ページから25ページまであります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入しなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を
開いたまま裏返して置きなさい。

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉

受験番号

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

読者にとっては①分類学自体が、めったに耳にしない学問分野だろう。まず初めに、新種を発見するためのツールである分類学の構造や歴史、そしてその必要性を紹介したい。

身の周りにいる生物を食料にして生活する我々動物にとって、それらを食べられる生物と食べられない生物に分ける、すなわち分類することは基本的かつ^aフカケツな習性、つまり本能である。分類学の基本作業はものを分けることにあり、これが我々の本能に根ざしているという点で非常に^bコンゲン的な学問と言える。

A、このような「人為分類」は、人間に有用なものに対してのみ行われてきたことであって、それ自体学問とは呼ばない。

B 人為分類では商業的価値のないものは対象にならないし、ある地域でしか通じない言語で語られる場合も多いからだ。これに対して、自然界の生物を余すところなく、なるべく真実に近い分け方に基づき、人類共通の言葉で秩序立てようとする試みが学問と言える。

自然は多様である。眼に触れることさえ困難なものも存在する。深海や地中、高度一〇〇〇メートルの上空などなど。生物だけでなく、そこに存在する鉱物、水、空気など、それらの自然の要素のすべてを人間が調査し、その成分を解析しきるのに、いったいどれだけの年月を^cツイやさねばならないだろうか。いや、仮にすべてを採取しつくしたとしても、それは刻一刻と変化する自然界の^dダンペンを切り取ったにすぎない。C、人間が自然の事物を完全に分類し理解しきることは実はほとんど不可能に近いと言えらるだろう。

それでも、たくさんの科学の偉人たちが、自然界のものを分類し、学問の枠組みに落とし込むために努力を続けてきた。メンデレーエフは、六〇種あまりの元素を、物性ではなく原子量に基づいて分類できることに気づいた。これは周期律の大発見へと

つながっていくのであるが、現代になってもなお、新種の元素が発見されている。自然とはかくも複雑で、人類の想像を超えた未知を^e含有しているのである。

翻^{ひるがえ}つて生物の分類はどうだろうか。② こちらにも多様だ。その「未知数」すら分からぬほどに。現在、地球上の命名された生物は一八〇万種を超え、③ それぞれが驚くほど複雑に関係しあっている。まだ記載されていない「未記載種」の数は少なく見積もっても八〇〇万種、多ければ一億種を超えるという予想もあるくらいである。

もし、一八〇万種もの生物が整理されていなければ、どうということになるだろうか。④ 例えば、掲載種の名前が五十音順に並んでいる昆虫図鑑でトンボの名前を調べることが想像してみてもいい。目の前の昆虫が「トンボ」の間であることは分かるが、果たして何トンボだろうか。パラパラと図鑑をめくりつつ、ある不安が頭をよぎる。

「この膨大な図鑑から、同じトンボが見つかるまでページをめくらねばいけないのだろうか……？」

図鑑の最後のほうにこの種が載っているのだとすれば、そこまでの全ページを確認しなくてはならない。しかも「ヤンマ」という、種名に「トンボ」という字面^{づら}がない種も確認している。このような名前^{なまえ}のトンボも見落とさずに確認しなくてはならない。さらに悪いのは、似た種が何種も見つかったときである。それらの種を比較するために、何度もそれらのトンボのページを往復し、実物と見比べなくてはならない。……こうして、せっかく、日本でも最大と言われる美しい「オニヤンマ」を捕まえたとしても、あと少しというところで、その名前を調べることがかなわず、終わってしまう可能性も大きいのである。

もしこの図鑑がきちんと、同じ特徴を持ったグループ、例えば、チョウ、ハエ、ハチ、コウチュウ、カメムシ、カマキリ、トンボ、アリ、などと分けられていれば、我々はトンボのセクションだけを眺め、オニヤンマにたどり着けることだろう。

ものを利用したり、深く理解しようとするには、それらを秩序立てて整理する必要がある。当たり前に使っている昆虫図鑑が、きちんと誰にでも昆虫を調べられるような構成になっているのは、さまざまな昆虫学者の苦勞^{たまもの}の賜物、知恵の結晶であり、これ

こそが分類学の役割を表した一つの形であると言える。

そしてこの図鑑の昆虫の名前には、オニヤンマのような和名だけでなく、^⑤ラテン語で《*Anotogaster sieboldii*》と書かれた種名も付されているはずだ。これこそが、世界で共通して用いられる学名であり、この学名を扱う点で、分類学は立派な学問であると言える。科学とは人類に知識を提供するものである。いかに真実に肉迫した重要な発見でも、すべての人に分かなければ科学と呼べない。このような知識の共有を阻む一つの問題は言語である。

例えば、牛は日本語では「牛」の一択であろう。しかし英語では〈bull〉(去勢していない雄牛)、〈cow〉(雌牛または乳牛)、〈ox〉(去勢した牛)、〈calf〉(仔牛)などたくさん呼び名がある。これはおそらく英語圏の国と日本との牛の利用頻度などの文化の違いに起因すると思われるが、それにしてもこのような違いがあつては、物の認識は言語間で異なってしまう。そこで分類学では、英語でもフランス語でもなく、すべてラテン語で表記するように定められている。ラテン語は一般になじみの薄い言語ではあるが、意味は分からなくとも誰もが同じ綴りで生物を認識できるようにした、ということは大きな発明なのである。

ではこの分類学は、どのように始まったのだろうか。現代へと続く分類学の基本的な構造を打ち立てたのは、スウェーデンの博物学者、カール・リンネである。彼は、一七五八年に出版した『自然の体系』によって動物分類学を、一七五三年に出版した『植物の種』によって植物分類学の基礎を築いた。

リンネが『自然の体系』で著す前にも、生物の分類は行われていた。ギリシャの哲学者アリストテレスは『動物誌』を著し、五〇〇あまりの動物を記述、分類し、[※]体系化するという自然史学の礎を築いた。日本では古代から中世、近世にかけて薬用植物を主な対象とする学問としての「本草学」が自然史学の礎となり、さまざまな動植物の記載が行われている。

しかし、当時は人類が知りえる生物の種数はそれほど多くなく、また、後者の本草学は学問というよりは、カタログ的な意味合いが強く、実用的な生物の性状や効能の記述に終始し、物そのものの形状、性質の詳しい記載や体系づけは行われていないも

が多かった。したがって、X。

これに対してリンネは、『自然の体系』の中で、「階層式分類体系」を提案した。これは、多数の種の中から似たようなもの（クラスター）を集め、さらにそのクラスター同士を集めて高次のクラスターを作る、という作業を繰り返し、入れ子式の階層構造をつくるものである。リンネは階層的な分け方によって、動物も秩序立てて「整理」できることを示したのである。

リンネはこれらのクラスターに、動物では綱こう、目もく、属、種、変種という階級を与え、階層構造に落とし込んでいく。現在では変種がなくなり、門（綱の上）と科（目と属の間）という階級が与えられている。そしてこれらの各階級にそれぞれラテン語の「学名」が与えられている。例えば二〇一五年に人間に害を及ぼす毒を持つ外来種として世間をにぎわせたヒアリは、階級順に、*Arthropoda*（節足動物門）、*Insecta*（昆虫綱）、*Hymenoptera*（ハチ目）、*Fornicidae*（アリ科）、*Solenopsis*（トフシアリ属）、*Solenopsis invicta*（ヒアリ）というラテン語による名前がつけられている。

これらの学名の中で、最小単位である種名だけは、二つの単語によって記述されている。これが、リンネの階層式分類体系のもう一つの特徴、「^⑥二語名法」である。リンネは、最小単位の種名のみ、他の上位の学名とは違い、それが含まれる「属名」と「種小名」という二つの単位で表すことにした。上のヒアリで言えば、*Solenopsis* が「属名」（トフシアリ）で、*invicta* が「種小名」である。単純な仕組みかもしれないが、ここには言語の統一に加え、さらに大きな特徴がある。それは単語を二つに限定したことだ。リンネが生きた時代のヨーロッパは、大航海時代に伴い、さまざまな動植物が輸入されてきた。当時の人々は、ある名前がついた動物と似たものを区別する場合、識別するための特徴を表す一語をその名前にさらに追加するというやり方で区別をつけていた。この方法では、似たものが多い種ではどんどん単語が増えてしまうことになる。例えば、カワウソは、《*Mustela plantis palmatis nudis cauda corpore dimidio brevior*》（足の先は手のひら状で、毛がなく、尾は体の半分しかないイタチ）という八単語から成っていたそうだ。

さらにこれは、名前であると同時に定義でもあった。そのため、この命名法では、もし動物の定義が変化すればそのつど種名が変わっていく。例えば、あるミジンコに「すべすべした ミジンコ」という名前が付けられていたとする。そしてこのミジンコが、夏季に頭部と尾部に長いとげを伸ばす習性を持つことが分かったとすれば、「すべすべした」とがりもする ミジンコ」などのように、名前を変えるのが当時のやり方である。これくらいであればまだよいが、前述したカワウソのような複雑な名前が、研究が進んで新たな特徴が発見されるたびに変わってしまうのでは、カワウソ談義などできたものではない。

しかしリンネは、二語名を種の定義ではなく、「記号」として扱った。その種の新しい特徴、例えば「すべすべした ミジンコ」に頭がとがる時期があることが分かっても、「すべすべした ミジンコ」のまま名前を変えないのである。このように名前が安定することがメリットとなるのだ。リンネはこの二語名法を、一貫してその著作で使用した。動物ではその始まりが『自然の体系』であり、その意味で、リンネはいわば動物分類学の確立者として現在に名を残している。

注 ※ 体系化する：多様なものを関係づけてまとめる。

(岡西 政典^{まさのり}『新種の発見』より)

問一 ~~~~~線部 a く e のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。(漢字は楷書ではっきりと書くこと。)

問二 ———線部①「分類学」とはどのような学問ですか。「く学問。」に続く形で本文中から五十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問三 本文中の に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえば
- イ なぜなら
- ウ あるいは
- エ だが
- オ したがって

問四 ——— 線部② 「こちらにも多様だ」とはどういうことですか。それについて説明した次の文の に当てはまる言葉を本文中から二字で抜き出して答えなさい。

生物の種類は の種類と同様に多様だ。

問五 ——— 線部③「それぞれが驚くほど複雑に関係しあっている」の文法的説明として、次の中から**正しくないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「それぞれが」は主語である。

イ 動詞が三つ用いられている。

ウ 「複雑に」は副詞である。

エ 「関係しあって」と「いる」は補助の関係にある。

オ 五つの文節から成り立っている。

問六 ——— 線部④「例えば、掲載種の名前が五十音順に並んでいる昆虫図鑑でトンボの名前を調べることが想像してみしてほしい」から始まる昆虫図鑑の具体例は、どのようなことを主張するために挙げられたものですか。その主張を述べた一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問七 ——— 線部⑤ 「ラテン語」とありますが、分類学が「ラテン語」を用いる意図として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ラテン語を用いる人々の認識を標準とすることで、ものの認識が言語間で異なるという問題を解決するため。
- イ 一般になじみ深い言語で表記することによって、どの言語を用いる人にも公平に知識を与えるようにするため。
- ウ 世界中で表記をラテン語に統一することによって、言語や文化の違いを超えて知識を共有できるようにするため。
- エ 古くから用いられているラテン語を用いることによって、分類学を権威づけ、立派な学問に押し上げるため。
- オ 生物の名前をラテン語で綴ることによって、生物の意味を全世界の人に分かりやすく伝えるようにするため。

問八 本文中の X に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア いずれも結局のところ、人類の役に立たなかった
- イ いずれも生物学の発展に貢献することができた
- ウ いずれも動植物を保護する手段にはなりえなかった
- エ いずれも体系だった学問には発展しなかった
- オ いずれも人類の歴史に名を残すことができた

問九 次の文章は、これまでの命名法と――線部⑥「二語名法」を比較したものです。

I

II

に指

定された字数で適当な言葉をそれぞれ入れ、説明を完成させなさい。

新種の生物に名前をつける際、これまでは似たものと識別するために、特徴を表す語を名前に追加していくという方法をとっていたが、この方法ではどんどん単語が増えてしまい、新たな特徴が発見されるたびに名前が変わってしまう。一方、

I (十字以内) という二語名法では、

II (三十字以内) 。

問十 次の会話文は、本文を読んで生徒たちが話し合ったものです。次の会話のうち**本文の内容と合わないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A：小さい頃、よく虫を捕っていたけど、名前が分からない虫はよく図鑑で調べていたなあ。この文章を読んで、その図鑑はたくさんの人が生物を分類してくれたからできたものだったということが分かったよ。

イ 生徒B：そうだね。アリストテレスやリンネの努力のおかげだよ。ただ、動物を五〇〇種しか分類できなかったアリストテレスより、生物を一八〇万種に分類したリンネの方を筆者は評価しているね。

ウ 生徒C：リンネが提案した「階層式分類体系」のおかげで、すばやく生物を調べることができるようになったんだね。クラスターに分けてくれていると、確かに分かりやすい。

エ 生徒D：クラスターってパソコンのフォルダみたいなものだね。私は画像データを年度別に整理しているけど、その中にまた「家族」とか「風景」とか名前をつけてフォルダに分類しているよ。こうしておくで後で探しやすいから。

オ 生徒E：リンネの二語名法もいいアイデアだね。もし昔の命名法のままでと、ジャイアントパンダは「中国の山間部に住む 草食の 繁殖能力の低い 白黒の 熊」という名前になっちゃうよ。どの動物もこんな名前だと図鑑が文字だらけになるね。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昼休みの教室には、机をくつつけたいくつもの島ができていた。大陸と呼びたいような大所帯もある。中学の給食の時間とは違う。めいめい仲の良い相手と昼食をともにすることができている。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みつつ分の島にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。宮多たちは、にやんこなんとかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さつきからぜんぜん会話に入れない。課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。①もう、相槌すら打てなくなってきた。

祖母の顔を思い出して、懸命に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるようなことなのだから。

「なあ、松岡君は」

宮多の話す声が、途中で聞こえなくなつた。ふいに高杉くるみが視界に入ったから。

世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅっと持ち上がった。a 虚勢を張るわけでもなく、おどおどするでもなく、たまごやきを味わっている。②その顔を見た瞬間、

「ごめん」と口走っていた。

「え」

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

ぼかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繡しゅうを集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。

わかってもらえるわけがない。ほんとうは『明治の刺繍絵画名品集』というぶあつい図録がよかった。残念ながらそちらは貸出禁止になっていたのだ。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなって、こうなって。勝手に指が動く。ふと顔を上げると、近くにいた数名がこつちを見ていた。男女混合の四人グループのうちのひとりが僕の手つきを真似て、くすくす笑っている。

「なに？」

自分で思っていたより、大きな声が出た。他の島の生徒たちが気づいて、こちらに注目しているのがわかった。宮多たちも。でももう、あとには引けない。

「なあ、なんか用？」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのか、ひとりがぎよっとしたように目を見開く。③ その隣の男子が「は？ なんなん」と頬をひきつらせた。

「いや、なんなん？ そつちこそ」

べつに。なあ。うん。彼らはもごもごと言ひ合ひ、視線を逸らす。教室に、ざわめきが戻る。遠くで交わされるひそやかなささやきや笑い声が、耳たぶをちりつと掠めた。

校門を出たところでキヨくん、と呼ばれた。振り返ったその瞬間に、強い風が吹く。

キヨくん。小学校低学年の頃のままに、高杉くるみは僕の名を呼ぶ。当時は僕も彼女を「くるみちゃん」と親し気な感じで呼んでいたのだが、学年が上がるにつれて会話の機会が減り、今ではもうどう呼べばいいのかわからない。

「高杉さん。くるみさん。どつちで呼んだらええかな？」

「どつちでも」

苗字が高杉というだけで塾の子らに「晋作」と呼ばれていた時期があつて嫌だった、なので晋作でなければ、なんと呼ばれても構わないらしい。

「高杉晋作、嫌いなん？」

「嫌いじゃないけど、もうちよい長生きしたいやん」

「なるほど。じゃあ……くるみさん、かな」

歩いていると、グラウンドの野球部やサッカー部の声がどんどん遠くなっていく。今日は世界がうっすらと黄色くて、遠くの山がぼやけて見えた。春はいつもそうだ。すべての輪郭があいまいになる。

「あんまり気にせんほうがええよ。山田くんたちのことは」

「山田って誰？」

僕の手つきを真似て笑っていたのが山田某らしい。

「私らと同じ中学やったで」

「覚えてない」

個性は大事、というようなことを人はよく言うが、学校以上に「個性を尊重すること、伸ばすこと」に向いていない場所は、たぶんない。柴犬の群れに交じった※ナポリタン・マステイフ。あるいはポメラニアン。集団の中で**もてはやされる個性**なんて、せいぜいその程度のものだ。犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る。

アヒルはアヒルの群れに交じれば見分けがつかなくなる。その程度のめずらしさであっても、学校ではもてあまされる。浮く。くすくす笑いながら仕草を真似される。

「だいじようぶ。慣れてるし」

けど、お気遣いありがとう。そう言って隣を見たら、くるみはいなかった。数メートル後方でしゃがんでいる。灰色の石をつま

みあげて、しげしげと観察しはじめた。

「なにしてんの？」

「うん、石」

うん、石。ぜんぜん答えになっていない。入学式の日「石が好きだ」と言っていたことはもちろんちゃんと覚えていたが、まさか道端の石を拾っているとは思わなかった。

「いつも石拾ってんの？ 帰る時に」

「いつもではないよ。だいたい土日にさがしに行く。河原とか、山に」

「土日にも？ わざわざ？」

「やすりで磨くの。つるつるのぴかぴかになるまで」

放課後の時間はすべて研磨にあてているという。ほんまにきれいになんねんで、と言う頬がかすかに上気している。

ポケットから取り出して見せられた石は三角のおにぎりのような形状だった。たしかによく磨かれている。触ってもええよ、と言われて、手を伸ばした。指先で、しばらくすべすべとした感触を楽しむ。

「さっき拾った石も磨くの？」

くるみは少し考えて、これはたぶん磨かへん、と答えた。

「磨かれたくない石もあるから。つるつるのぴかぴかになりたくないってこの石が言うてる」

④ 石には石の意志がある。駄洒落だじゃれのようなことを真顔で言うが、意味がわからない。

「石の意志、わかんの？」

「わかりたい、いつも思ってる。それに、ぴかぴかしてないときれいやないってわけでもないやんか。ごつごつのざらざらの石のきれいさってあるから。そこは尊重してやらんとな」

じゃあね。その挨拶があまりにも唐突でそっけなかったので、怒ったのかと一瞬あせった。

「キヨくん、まっすぐやる。私、こっちやから」

川沿いの道を一步踏み出してから振り返った。ずんずんと前進していくくるみの後ろ姿は、巨大なリュックが移動しているように見えた。

石の意志という話は、よくわからなかった。わからなくて、おもしろい。わからないことに触れるということ。似たもの同士で「わかるわかる」と言い合うより、そのほうが楽しい。

ポケットの中でスマートフォンが鳴って、宮多からのメッセージが表示された。

「昼、なんか怒ってた？ もしや俺なんかあかんこと言うた？」

違う。声に出して言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、気づいてしまっただけだ。自分が楽しいふりをしていることに。

いつも、ひとりだった。

教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がないのは、心もとない。ひとりでぽつんと弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさをごまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、もっともつとさびしい。

好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。その苦しさにも耐える覚悟が、僕にはあるのか。

⑤ 文字を入力する指がひどく震える。

「ちやうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繍の本」

ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繍を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。

「こうやって刺繍するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」

ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」

⑥ そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐がほどけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がばしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙が滲む。

きらめくもの。揺らめくもの。目に見えていても、かたけないものには触れられない。すき取って保管することはできない。太陽が翳ればたちまち消え失せる。だからこそ美しいのだとわかっていても、願う。布の上で、あれを再現できたらいい。そうすれば指で触れてたしかめられる。身にまとうことだって。そういうドレスをつくりたい。着てほしい。すべてのものを「無理」と遠ざける姉にこそ。きらめくもの。揺らめくもの。どうせ触れられないのだから、なんてあきらめる必要などない。無理なんかじゃないから、ぜったい。

どんな布を、どんなかたちに裁断して、どんな装飾をほどこせばいいのか。それを考えはじめたら、いてもたってもいられなくなる。

それから、明日。明日、学校に行ったら、宮多に例のにゃんこなんとかというゲームのことを、教えてもらおう。好きじゃないものを好きなふりをする必要はない。でも僕はまだ宮多たちのことをよく知らない。知ろうともしていなかった。

⑦ 靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。

(寺地 はるな『水を縫う』より)

注 ※ ナポリタン・マスティフ：イタリア原産の大型の犬。

問一 線部 a 「虚勢を張る」、b 「もてはやされる」、c 「心もとない」のここでの意味として最も適当なものをそれぞれ

次の中から選び、記号で答えなさい。

a 「虚勢を張る」

- ア 相手の気力を奪う
- イ 厚かましく振る舞う
- ウ 大胆に立ち向かう
- エ 強そうなふりをする

b 「もてはやされる」

- ア 期待される
- イ 軽視される
- ウ 賞賛される
- エ 肯定される

c 「心もとない」

- ア 恥ずかしい
- イ 不安だ
- ウ 憂うつだ
- エ じれったい

問二 ――線部①「もう、相槌すら打てなくなってきた」とありますが、このときの「僕」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 共通の話題で盛り上がっている宮多たちの会話についていこうとするが、無理をしてその場にいることに疲れ、気持ちがくじけそうになっている。

イ 宮多たちの話をただ聞いているだけで、自分から話題を広げることがまったくできず、自分のコミュニケーション能力のなさに気がめいつている。

ウ ゲームをする習慣がないために自分だけ宮多たちの会話に入ることができず、みんなからつまらないやつだと思われることにいらだちを感じている。

エ 宮多たちにわざと自分が関心のないゲームの話をされ、このままでは友達がいなこと家族に心配をかけてしまうかもしれないと、申し訳なく思っている。

オ せっかく宮多たちのグループに入れてもらえたものの、誰も自分が会話に入れるような配慮をしてくれず、自分に対する扱いのひどさを不満に思っている。

問三 ――線部②「その顔を見た瞬間、『ごめん』と口走っていた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クラスで孤立していることをものともしない高杉くるみの姿を見て、自分が宮多のグループを抜けて高杉くるみの仲間

なってやらないといけな思ったから。

イ みんながグループを作っている中で、一人でも凛りんとしてゐる高杉くるみの姿を見て、宮多のグループに属していることで得意気になっていた自分が情けなく感じられたから。

ウ 一人でいても全くさびしうにしていな高杉くるみの姿を見て、一人でゐる人間はさびしいと決めつけていた自分の浅はかさに気づき、高杉くるみに申し訳なく思ったから。

エ グループから仲間外れにされていても、気にせず自分の時間を過ごしてゐる高杉くるみの姿を見て、宮多たちに愛想笑いをしてゐることに罪悪感がわいてきたから。

オ グループに属してゐなくても、周りを気にすることなく堂々としてゐる高杉くるみの姿を見て、自分の心をごまかしてまゝで周りに合わせる必要はないと思えてきたから。

問四

——線部③「その隣の男子が『は？ なんなん』と頬をひきつらせた」とありますが、このときの「隣の男子」の様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア からかった相手である「僕」が食ってかかっていたことが予想外で、あせっている。

イ 「僕」が急に言い返してきたため、興奮してゐる「僕」を落ち着けようとしてなだめている。

ウ 「僕」が大声で反撃してきたことで、すっかり周囲の注目を浴びてしまい、動揺している。

エ あっけに取られている友人の代わりに、どうにか「僕」を言い負かそうと必死になっている。

オ 「僕」を更に挑発することで、「僕」がどんな反応をするのかをおもしろがっている。

問五 ──線部④「石には石の意志がある」とありますが、「高杉くるみ」から「石の意志」の話聞いた「僕」はどのようなことに気がつきましたか。本文中の言葉を使って五十字以内で説明しなさい。

問六 ──線部⑤「文字を入力する指がひどく震える」とありますが、それはなぜですか。理由を説明しなさい。

問七 ──線部⑥「そのメッセージを、何度も繰り返し読み返した」とありますが、このときの「僕」の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 宮多が自分の刺繍を褒めてくれたことがどうしても信じられず、もらったメッセージを何度も確認しながら、宮多の真意に考えを巡らせている。

イ 宮多が刺繍を褒めてくれたことで、ありのままの自分であることを許容されたような安心感が生まれ、その喜びとともに宮多からの言葉を噛みしめている。

ウ 急に自分からグループを抜けたことで宮多を傷つけてしまったのに、逆に自分を気遣ってくれる宮多の思いやりや優しさが心に沁み、温かい気持ちになっている。

エ 宮多からのメッセージに目を通しながら、子どもっぽい遊びに夢中になっている宮多たちを見下していた自分に気づき、恥ずかしく思っている。

オ これまでには誰にも自分の趣味をわかしてもらえず、一人で苦しんできたが、やっと共通の趣味を持つ友達ができたことで

心強く思っている。

問八 ——— 線部⑦「靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる」とありますが、このときの「僕」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たとえ興味がなくても、ゲームについて宮多に教えてもらい、もう一度仲間に入れてもらおうと決意するとともに、周囲と協調性を持って関わっていきたいと考えている。

イ たとえ時間がかかったとしても、クラスメイトに刺繍のすばらしさを広めようと決意するとともに、これまで知らなかった世界にも触れ、多様性を尊重できる人間になりたいと願っている。

ウ たとえ刺繍を趣味であると公言することによって孤立するとしても、決して物怖おじすることなく一人で生きていこうと決意するとともに、人を理解することの大切さを痛感している。

エ たとえ多くの人には理解されなくても、自分の好きなことを追い求めていこうと決意するとともに、宮多たちとの関わり方をあらためることで、関係を深めていくことができそうだという期待を抱いている。

オ たとえすぐには実現できないとしても、自分が理想とする美しいドレスをつくろうと決意するとともに、自分も宮多たちが好きなゲームを楽しむことで、学校生活も誠実に送りたいという希望を持っている。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

少納言公経きみつねといふ※手書てがきありけり。 ※県召あがためしのころ、心の内に、もしよろしき国賜たまはりなば、寺作りたしと思ひけるを、河内かはちといふあやしの国の守かみにぞなりたりける。思ひたる国にあらざれば、本意ほんいなく覚えて、①さらば、古き寺などをば修理せんと思ひて、河内国に下りにけり。さて、その国の中にここかしこ見歩きけるに、ある古き寺の仏の下に、②文かみの見えけるを、開きて見れば、公経といふ者の書きたるものなり。③こはいかにとあやしみて、細かに見れば、来世にこの国の守となりて、この寺をこそ修理せめといふ※願を立てたる文にてなんありける。これを見て、しかるべかりけることと思ひ知りて、④望もちみのかなはぬことを※いさめつつ、信をいたして修理しけり。書きたる文字の a やうも、今の※手につゆほど変はらず似たりければ、⑤げげに前まへの世の定めなりと思ふ。人は前の世を知らず。されど、何事もこの世ひとつのことならず。空むなしく心を碎き、走り求めて、かなは⑥ぬぬことなれば、神をそしり、仏をさへ恨み奉る。b いみじう愚かなり。

（『発心集』より）

注 ※ 手書：字の上手な人。

※ 県召のころ：国司などの地方官を任命するころ。

※ 願を立てたる文：願いを神仏に捧げる文書。

※ いさめつつ：気を取り直して。

※ 手：筆跡。

問一 ―― 線部① 「さらば、古き寺などをば修理せん」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア それならば、古い寺などを修理してくれるだろう。
- イ それならば、古い寺などを修理しよう。
- ウ それならば、古い寺などは修理しない。
- エ しかし、古い寺などを修理できそうもない。
- オ しかし、古い寺などは修理しないつもりだ。

問二 ―― 線部② 「文」の具体的な内容を本文中から二十三字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問三 ―― 線部③ 「こはいかに」は「これはいったいどうしたことか」という意味です。「これ」の具体的な内容を現代語で説明しなさい。

問四 ―― 線部④ 「望み」とは何ですか。それがわかる部分を本文中から十七字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 〜〜 線部 a 「やう」、b 「いみじう」をそれぞれ現代仮名遣いに直し、**ひらがな**で答えなさい。

問六 ——— 線部⑤ 「げに前の世の定めなりと思ふ」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 赴任先の河内国がとても貧しいため自分の望みをかなえられないのは、前世からの運命だと思ったということ。
- イ 赴任した河内国がとても貧しいのは、前世で寺を修理せずに放置したことによる運命だと思ったということ。
- ウ 河内国という貧しい国の国司になったのは、前世で寺を壊してしまったことによる運命だと思ったということ。
- エ 貧しい国である河内国の国司になって古い寺を修理することになったのは、前世からの運命だと思ったということ。
- オ お寺の修理もできないような貧しい国である河内国の国司になったのは、前世からの運命だと思ったということ。

問七 ——— 線部⑥ 「ぬ」と同じ意味のものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 春になりて桜咲きぬ。
- イ 馬、にはかに倒れて死ぬ。
- ウ 風吹きて、花散りぬ。
- エ 雨風やまぬ夜、近き宿に泊まる。

問八 次の会話文を読んで、後の問いに答えなさい。

先生：『発心集』は鎌倉時代に書かれた説話集です。この『発心集』について、ほかに知っていることはありますか。

生徒A：筆者は鴨長明かもろちやうめいです。『発心集』のほかにも『A』が有名です。

生徒B：タイトルの「発心」とは「発起」つまり、「思い立って、行動に起こすこと」という意味ですが、もともとは「仏教の悟りを得ようと思立つこと」という意味です。

生徒C：出家し、俗世間から離れて生活していた鴨長明が書いた『発心集』には、Bさんが言ったような「発心」をテーマにした話が収められています。ほかにも、「遁世とんせい」、「往生」をテーマにした説話も多くあります。どれも、仏教に深く関係したテーマです。

生徒A：説話には筆者の感想が添えられることも多いのですが、今回読んだ古文も、「B」の部分から鴨長明の感想になっています。

生徒B：この感想の部分で、鴨長明は前世からの運命を考えない人々のことを批判しています。

(1) 会話文中の A に当てはまるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 竹取物語 イ 平家物語 ウ 方丈記 エ 徒然草 オ 枕草子

(2) 会話文中の B に当てはまる部分を古文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

(3) 会話文中に 線部「批判しています」とありますが、鴨長明は人々のどのような姿勢を批判していますか。古文中から十四字で抜き出して答えなさい。

【一】

問一 a 不可欠	b 根源	c 費
d 断片	e がんゆう	

問二 自然界の生きようとする学問。問三 A エ B イ C オ

問四 元素 問五 ウ 問六 ものを利用

問七 ウ 問八 エ

問九 I 単語を二つに限定する

II

、新 名し 前い が特 安徴 定が す分 るか るっ て	も 名 前 を 変 え な い の で
---	--

問十 イ

【二】
 問一 a エ b ウ c イ

問二 ア 問三 オ 問四 ア

問五

う こ と 。	者 同 士 で 共 感 し 合 う よ り も 楽 し い も の だ と い	わ か ら な い こ と に 触 れ る と い こ と は 、 似 た
------------------	--	---

問六 本当は手芸が趣味であることを宮多に打ち明けようと思うが、そんな自分を受け入れてもらえるかどうか不安に思っているから。

問七 イ 問八 エ
 問一 イ 問二 来世にこのくそ修理せめ

問三 古い寺の仏像の下に、自分と同じ名前の人を書いた手紙があったこと。

問四 もしよろしし寺作りたし 問五 a よう b いみじゆう

問六 エ 問七 エ

問八 (1) ウ (2) 人は前の世

(3) 神をそしり、仏をさへ恨み奉る